「暮らしの詩」　村田千輝

「豊かな暮らし」この言葉を聞いて皆さんは何を想像するだろうか。

　私が想像する「豊かな暮らし」を一言で表すなら「不便で貧しい暮らし」だ。

　「豊かな暮らし」と「不便で貧しい暮らし」、この言葉だけ聞くと対照的に聞こえるかもしれない。

確かに一般的に言われる「豊かな暮らし」とは、誰よりも綺麗で清潔な服や便利で高級な物を持ち、食べたい時にいくらでも食べられて、財産や収入が誰よりも多く、経済的に恵まれている暮らしのことだ。

しかし、それが本当に「豊かな暮らし」なのだろうか。私は一般的に言われる「豊かな暮らし」は、周りにある物だけが満たされているだけで、心は満たされていないように思える。

なぜなら、私がそうだからである。どんなにお金があったとしても、前から欲しかったものを手に入れたとしても、また別の物が欲しくなる。一つ手に入れ、また次の物と、その物欲には際限がないように思う。そんな永遠とも感じる、物欲の連鎖。何を買ってもらっても、私の心は満足出来なかった。物欲としての最大とも言えるお金はどうだろうか。確かにあって困ることは少ないのかもしれない。しかし、いったいどれだけのお金を手に入れれば、人は満足するのだろうか。

私たちのおじいちゃん、おばあちゃんが子供の頃は、日本はまだ貧しく、今のように物が溢れてはいなかったが、自分たちで食べ物を育て、収穫した物を、近所の人たちと分け合うことが当たり前だった。私はこの「貧しさ」や「足りなさ」ということから、学ぶべき物が多くあると思っている。

愛農に来て私は以前よりも、物やお金は無いが心が満たされることを実感している。

例えば、お菓子を友達と作り分け合ったり、野草や山菜を取りに行き、一緒に調理してお腹いっぱいになるまで食べたり、畑を耕すのを手伝ってもらったりと、決して一人では体験できない、喜びを感じることができた。誰かと何かをする。当たり前のことのようで、大切なことだと感じる。昔から田植え作業が一段落する６月にその慰労や豊作を祈願し、集落全体で食事を行う「さなぶり」という風習があった。それは昔の人たちが互いに助け合い、共に生きる確かな存在を構築するための方法であったのであろう。それはきっと昔の人たちが暮らしに取り入れ、当たり前にしてきた、「分かち合い」であり、大切に繋いできた「分かち合う心」ではないだろうか。支え合うわないと生活が成り立たないことへのわずらわしさはあるのかもしれないが、私は田植えや稲刈りのように、本当にしんどい時に支え合えること、足りないからこそ、補い合えること、そんな隣人が自分のそばにいて、共に助け合えることが本当に心強い生き方なんじゃないかと思っている。

他にも、一般的に不便で貧しいと言われている暮らしは、今のような物に溢れた消費社会から来る環境問題や地球を壊していくようなことは少なかったのではと考えている。それは、自分たちで食べ物を育てることを通して、自分たちがどのように生かされているのか。知っていたからではないだろうか。

私は愛農に来るまで、スーパーにトマトやキュウリが冬でも並んでいることに違和感がなかったし、一年中同じ食べ物を目にしてきたため、食べ物に旬があることすらも知らなかった。

この出来事が当たり前になっている現代は考え直さなければならない問題がたくさんあるように感じている。

なぜなら、一年中同じものが並び、旬が無いということは、もしかしたら自然環境を破壊することに繋がっているかもしれないからである。つまり、旬の食べ物でない食材は、温室と言われる人工的なガラス温室やパイプハウスなどで栽培され、冬でも室内を夏の気候に近づけるため、石油など多くのエネルギーを消費し、二酸化炭素を増やし、地球温暖化にも繋がる。私たちが当たり前にしている暮らしの影響は、自然環境へ、そして、私たちの環境に繋がっているのである。昔の人は自然を壊すこと、地球を破壊することが自分の生きる糧すらも殺してしまうことを知っていたのではないだろうか。だから、今よりも地球を壊すことをしなかったのではないだろうか。全ての命が共存し循環し、生かされていることを知っていた昔の人たちだからこそ、何年も同じ暮らしを続けてこれたのかもしれない。それは今私たちが目指さなければならない、誰も置いてきぼりにならない永続性のある社会になるのではないだろうか。

そして、もう一度想像してみてほしい。本当に「豊かな暮らし」とは何かを。

私たち一人一人が一時の豊かさではなく、自然の中で人と喜びを分かち合い、命の共存と循環を五感で感じ、「不便で貧しい暮らし」をすることで、永続的な「豊かな暮らし」になっていくことを知ってほしい。

だから私は自然の中で、お金に頼らず食べ物は有機農業で自給し、誰かと苦労も喜びも分かち合う永続性のある暮らしをしたい。

そして、自然の中で自立し、恩返しの循環の中に入れるような人間になりたい。

この暮らしが「エゴ」と言われようと「視野が狭い」と言われようと、私は求めて生きたい。「不便で貧しくとも本当に豊かな暮らし」を。私たちの今日の暮らし方が、未来の私に繋がっているのだから。